

いつも見る風景

虎ノ門駅で降りて、階段を上がり、駐輪場を抜けて江戸城外堀跡を通り、さざれ石を横目にエスカレーターを上がる。そこから視線を左に向けると、旧文部省の庁舎と新庁舎の間、空と手前にもみじが見える。春も夏もそして秋も同じ景色を見て職場に出勤する。そこが私にとっての1日の仕事の始まりを感じる場所であり、気持ちを切り替えられる場所だ。

今年度地方から文部科学省に配属となり、4月1日の初日。出勤したときは全く気もそぞろで正面ゲートをくぐるだけでその日の全集中を使い果たしていたが、3か月も経てば、少し周りを見る余裕が出てくる。同じ景色を毎日見ていると、少しずつ変化が見えてくる。雲一つない晴れの日やどんよりと重い雲が横たわる日、焼けるように暑い日や息を吐くと白くなるほど寒い日、それぞれに表情があって、時間の移ろいを感じられる。

地元で働いているときも、同じような場所があった。家から職場までの距離が近く、自転車で通勤していたのだが、仕事を終えて、夕方家に帰る途中、自転車で交差点を渡った後、片側4車線の広い幹線道路の先、高架の上に真っ赤な夕焼けが輝いている。その風景を見る度に、今日も色々あったが1日頑張ったという気持ちになる。仕事で壁にぶつかった日も、一つの事業をやっとやり遂げられた日も、全てそこで区切りを付けてくれる。

東京にいたときも地元にいるときも、同じように気持ちの切り替えられる場所がある。東京は目まぐるしく動いている場所で、気を抜いているとどんどん流れに飲み込まれていってしまう。朝の通勤ラッシュでも人の波にのまれ、職場でも仕事の波にのまれて、気持ちが浮足立ってしまう。そんな時に、どこか自分だけの心を仕切り直すことができる場所があるといい。

文科省に来て、もう少しで10か月が過ぎようとしている。長いようで短く、あっという間に過ぎていった10か月だったが、私の人生にとっては本当に重要な1年となった。同じ境遇の地方からの研修生と一緒に仕事をし、仲間になり、仕事が終わったら酒を飲んで楽しく過ごす。この年齢になって、一生の仲間ができるなんて思いもよらなかった。また、奇しくも東京に来たのと同じタイミングで結婚し、妻と一緒に新生活を東京で始めることになったが、妻を含めて本当にたくさんの人に支えられていることを実感する。

残りの派遣期間、やり残すことのないよう存分に楽しもうと思う。そしてまた、いつも見る風景を前に仕事を始める。

(K.M)

